

2020.11.30.

T.Kobayashi

はじめての一人旅

中学二年生になった夏休み、両親の差し金もあって、母方の祖父母が暮らす田舎へ一人旅をすることになった。「落ち着きがなく、学校の成績もやや思わしくないで、少し精神面を鍛えて落ち着いて勉強してこい」というのが理由だったと記憶している。

行先である「田舎」は、小学校5年生から6年生の間の10ヶ月ほど転校した所なので、その地に行ってしまうと、知らない土地ではない。それまで、父または母が同行しての旅はあったが、一人旅の経験はなかった。六年生の後半頃から、都内の博物館などへは一人で出かけるようになったが、何百 Kmの長旅はしたことがない。夏休みの宿題もカバンに入れての約二週間の旅、この時の記録が当時の日記帳に綴られていた。(文章はそのまま)

昭和 33 年 8 月 14 日 (木) 天気=晴のち雨 大張行 (北町→市ヶ谷→上野→白石→広萱)

3 時 15 分におこされて市ヶ谷駅へ向かったのは 3 時 45 分だった。ホームでしばらくまつと 4 時 26 分の東京行がきた。客は皆寝ていた。神田から山手線に乗りかえると旅に行く人が多かった。

上野で 12 番線に行くともう汽車がついていた。乗るともう客がいた。中学二年の男の子をつれたおばさんがいたのでそのとなりへ乗った。まだ発車まで 30 分あったので新聞を買いに行ったが売ってなかった。

いよいよ僕を乗せた 5 時 40 分盛岡行は発車した。だれかの携帯ラジオが 7 時の時報をしたとき、もう古河へついていた。小山 (7 時 20 分) 片岡 (8 時 50 分) 東那須野 (9 時 30 分) と進み宇都宮の 12 分停車の時、新聞を買った。弁当を食べてもなかなか腹にはいらぬ。食べ終わったのはちょうど郡山だった。

となりにおばさん達はここで磐越西線に乗りかえた。僕はまだあと 2 時間半だ。やっと腹がすいたので福島でサイダーを買って飲んだ。

2 時 40 分ついに白石へついた。まだバスまで 2 時間ある。白石駅へ荷物をあづかって散歩した。

駅前で局長さんのお兄さんと会った。雨がずいぶんふっていた。

おじいちゃんの家へついたら 5 時すぎにいた。夕食をたべて 8 時半ごろ早くねた。

牛込北町に住んでいる頃だった。まだ暗闇の 3 時 45 分に家を出て、牛込の高台から坂道を下って市ヶ谷駅を目指した。目の前に広がる外濠をまたいで入った市ヶ谷駅にはまだ電灯が光り輝いていた。

東京行の始発電車は、チョコレート色の三段窓の電車だった。「グーン」という下っ腹に響くような唸り声をあげて走り出す電車は、暗闇を裂きながら進むようだった。

上野駅から出る長距離列車は、お盆の帰省客でいっぱい、早朝にもかかわらずどのプラットフォームにも旅支度をした人が沢山いた。

一人旅の最大の心配事は、「悪い人に会わないか」だった。スリ・置き引き・万引きはまだ心配すべき時代だったので、どんな人の隣へ座るかには重要な課題であり、網棚の荷物には常に眼を配り、緊張の連続だった。

「中学生をつれたおばさん」の隣へ座ることができて、かなりの安心を手にした感じを覚えている。

各駅停車の列車で9時間、日の出から日の入りまでをたっぷり使った長旅が終った。

東北本線白石駅は、目的地である丸森町大張への入口になる。ここまで来ればもう心配はない。そんな気持ちの余裕が駅前の散歩になり、郵便局長の息子さんと出会ったことでさらに緊張感から解放されて「転校で 10 ヶ月を過ごした村への帰郷」に切り替わった。

約二週間の滞在期間はあっという間に過ぎた。持って行った夏休みの宿題や課題などをこなし、旧友との再会も果たし、田舎の自然をたっぷり楽しむこともできた。

祖父母からいただいたお土産は、お米など田舎ならではの物ですっきりと重い。復路の長い旅が……。

昭和 33 年 8 月 26 日(火) 天気=雨

いよいよ東京へ帰る日がきた。台風の影響ようらしく朝から雨が降って弱っている。

9 時 20 分のバスで祖母といっしょに白石へ向かった。バスから降りて 1 時間半くらい待って、

11 時 54 分発上り準急上野行に乗りこんだ。仙台発なのに混んでいて席がとれなかった。汽車が発車してからあたりをみて席をさがしたが、なかった。もうしばらく田舎へはこれれないと思うと何となくさびしくなってきた。

汽車が福島へついた時横にいた人がおりたのでやっとなすわれた。

盆暮の帰省客で混雑する時期には、座席が確保出来ず床に腰を下ろしたり、立ったままで 8 時間余りを旅することは珍しくなかった時代。座席が確保出来るということは何にも代えがたい宝だった。腰を下ろしてほっとすると同時に、前後左右を見回して「危なそうな人はいないかな？」。

身の安全が確認出来ると視線は車窓の景色に移り、流れるように走る車窓の景色を眺めている内に睡魔が襲ってくる、というのが列車の旅の常ではあるが……………。

途中阿武隈川の鉄橋から川をみたらどす黒い水がいっぱい流れていた。台風によるえいきょうもバカにはできない。その時にはそれですんだがその後はただじゃすまなかった。

それは、那珂川の鉄橋が台風による水害でとれなくなってしまったのだった。黒磯駅で 3、40 分停車して車掌の話をきいた。「つぎの東那須野と西那須野駅間の鉄橋が洪水で不通となっているので二駅間をバス連絡して、のぼりは東那須野、下りは西那須野でおり返すことになった」ということだった。

黒磯を発車すると車内は下車用意で大わらわだった。

日記の文中には「那珂川の鉄橋が洪水で…」とあるが、地図を見直してみると那珂川の支流の「熊川」または「蛇尾川(さびがわ)」と思われる。東那須野駅(現在の駅名は那須塩原)を出た列車が最初に渡る川は「熊川」で、並走する国道4号線もここで川を跨いでいる。

熊川より西那須野寄りにある「蛇尾川(さびがわ)」は普段は伏流になっているが、豪雨に見舞われると奥那須・奥塩原のいくつもの谷から集めた水が豪快に走りまくる暴れ川と言われていた。おそらくこの時に不通箇所となったのは、この川を跨ぐ鉄橋だと考えられる。

無事東那須野についたがバスをまつのに大変だった。米八升に衣類、弁当、本と三つの荷物にこまっていたら秋葉原へ行くという親切なおじさんが東京まで持つのを手伝おうと言ったのでおねがいをした。この大混雑の最中なので何とも言えないうれしさだった。6、7 台目のバスに無事乗ったがまた満員で苦労した。約 15 分バスにゆられて西那須野についた。

バスは増水した橋を避けて、北方を迂回する形で上流の橋を渡って西那須野駅に向かった。雨の中、何台ものバスを待ってようやく乗り込みはしたものの超満員。いくつもの荷物を持って、どこかにつかまることも難しい状態なので、バスがブレーキをかけたり曲がったりする度に悲鳴や嬌声が聞こえた。

西那須野駅に着くと、列車の運行状況を手際よく把握しなければならない。構内放送を注意深く聞き、臨時列車に乗りこむことができた。白石駅で乗車したのは 11 時 54 分、席にありついたのが福島駅、予期せぬ出来事の中で昼食は摂れたのだろうか？ 日記には記述はなく、我がことながら今になって気になった。

いよいよここから又汽車に乗った。臨時折返し各駅停車上野行だった。準急券は上野で払いもどすうだ。発車したのは午後 6 時 00 分。すでに3時間近くおくらせていた。

やがて上野につくと予定時刻より 3 時間 10 分おくらせていた。準急券をはらいもどしていっしょのおじさんと向かえにきているはずの姉をさがした。いなかったのおじさんといっしょに秋葉原まで行きわかれて都電で帰った。

さいわい事故はなかったが、とんでもないことだった。

姉は 2 時間まったがこなかったのであきらめて帰ったということだった。準急にのった効果なく、おそく

つき、それに倍もつかれた。

幸いなことに「悪い人」ではないおじさんと出会い、この方の力添えを得て祖父母からの土産をひとつも失うことなく持ち帰ることができた。

日記には書かれていないが、西那須野駅を発車したのが 18 時なので、上野着は 21 時半か 22 時位だったに違いない。「倍もつかれた」の記述がすべてを物語っている。

各世帯に電話が引かれてはいなかった時代、出発前にハガキまたは電報で連絡をして出迎えを頼むのが通常の手段だった。出迎えに来てくれた人は「ただひたすら待つ」しかないし、予定どおりの旅ができていない旅人の方も「今起きている出来事」を知らせる術もない。それぞれが、それぞれの戦場で全力を尽くし、待つ以外に手はないし、場合によっては「諦め」もあり、「忍耐」もあり、「我慢」も「奮闘」もある。

携帯電話が普及して、「必要以上の情報が錯綜して混乱を招く」時代には想像もつかないことだろう。

祖父母の土産の米八升は重量にすると 11Kg あまりになる。330Kmの旅の荒波を越えて食卓に辿り着き、食べ盛りの 4 人兄弟を抱える一家にとって「価値ある土産」だっただろうが、そのことについては何も記述はなかった。

ともあれ、我が人生初の「長い一人旅」は終わった。学問の上での成果はともかくとして、精神面の鍛錬の効果は少なからずあったに違いないが、自分では何もわからない。

しかし、のちに鉄道旅行・登山などに入り込む「旅好きな男」になることには多少なりとも影響していたかもしれない。

以上